一休の頂相を読む（1）
―朱太刀像―

飯島　孝良

〔一休像（京都・酬恩庵一休寺蔵）〕

一休の頂相（ちんそう）には、しばしば立派な朱太刀が描かれている。この背景になった逸話が、『一休和尚年譜』永享七年［一四三五］一休四十二歳条にある。一休が木刀の柄（つか）を弾きながら堺の街中を練り歩いているとき、住民が口々に「剣は殺しに使うべきものを、そんな木刀でどうしようというのか」と問うてきた。すると一休は「今のニセ禅者というべき連中はこの木刀のようなものじゃ、鞘に収まっていれば真剣にみえるが、抜いてみれば只の棒きれで、殺しも活かしも出来はせん」と答えた

ので皆が笑った、という。〝剣の柄を弾く〟というのは、唐代に成立して室町期の日本でも広く読まれていた『蒙求』の「馮諼折券」（更に遡れば『史記』「孟嘗君伝」や『戦国策』斉策四）に典拠がある。中国戦国時代の斉の馮諼が孟嘗君の食客（才能を買われて客として養う代わりに主人を助ける者）となっていたが、その待遇が悪かったので、剣の柄を叩きながら遠回しに非難する歌を歌った、というものである。一休はこれを踏まえ、禅者たるもの、活かすも殺すも自在の境地でなくてはならぬといい、同時代の禅門を批判したということである。この「殺人刀活人剣」は、禅ではしばしば重視されるものである（『円悟仏果禅師語録』巻十四［大正蔵巻四七・頁七七八中］ほか）。

また、この頂相には一休の自賛が書き込まれている――「百年、東海の禅世界、一段の風顛、太だ妖怪。扶桑国裏、今は禅無し。我が面前、誰か禅話を弄す」。すなわち、「この百年間の日本の禅界で、一段と際立った風顛、まことに妖怪であるのが、この一休じゃ。日本に今や禅は無い、この一休を眼の前に誰が禅を説けるものか」という、非常に烈しい文言である。

ここにある「風顛」という語は、「常軌を逸した行動をすること。また、その症状の人。癲狂。瘋癲病」（『日本国語大辞典』）、「①精神の状態が正常でないこと。また、その人。②通常の社会生活からはみ出して、ぶらぶらと日を送っている人」（『大辞泉』）などという定義がみえる。「通常の社会生活からはみ出して、ぶらぶらと」というと、まさに「フーテンの寅」（『男はつらいよ』）そのものであるが、『男はつらいよ』でも、寅次郎であってこそ、世間の杓子定規にしたがって真面目に生活している家族が見逃していた「人情」に気づかせる場面が見どころといえる。一休

の「風顛」もまた、杓子定規の価値観に縛られた「東海の禅世界」に揺さぶりをかけているものとみえる。

そして、この頂相には「前大徳虚堂七世東海順一休」と自署がある。つまり、「南宋の虚堂智愚から数えて七代目の法孫である日本の一休宗純」と自称しているのである。これはすなわち、臨済宗大徳寺の法系意識の表れに他ならない。大応国師ないし妙勝寺（いまの酬恩庵一休寺）を称える『狂雲集』三二三では、「中国には虚堂を嗣ぐべき者がいないとされたが、大応にはたしかに伝授された――そしてその遺風を嗣ぐ東海〔＝日本〕の妙勝寺と一休自身へも伝わっている」というのである。これは大応の帰国に際して虚堂がその力量を惜しんだとする逸話に因んでおり、大応が送別される際に虚堂から授けられたという偈には、「東海の児孫、日に転（うた）た多からん」とある。これは「日多（にった）の記」と呼ばれ、中国から日本へと臨済禅の伝わることを予言した授記とされている。一休は、大応が日本に帰ってきてこそ虚堂以来の臨済禅が伝わったと表明し（『狂雲集』二一三・六四五など）、或いは大応を勧請開山とする妙勝寺の復興を志して造らせた大応の木像を開山堂に安置し（『一休和尚年譜』康正二年丙子〔一四五六〕一休六十三歳条、『狂雲集』一四三）、「虚堂七世」「大応六代」「東海一休」と重ねて自称するのである。

「風顛」「妖怪」と自称して酒・色（女犯や男色）・詩作に「婬する」（『狂雲集』五七三）とも表明する一休の根柢には、現状に固着してしまった世への批判のみならず、伝燈への強い意識があるといえる。（つづく）

飯島 孝良（いいじま たかよし）
花園大学国際禅学研究所専任講師。専攻は禅文化史・日本宗教思想史。主な著作に、『語られ続ける一休像―戦後思想史からみる禅文化の諸相』（ぺりかん社）ほか。